

対訳西鶴全集五

西鶴諸國ばなし
懷硯

訳注

富麻
主生
昭磯
雄次

明治書院

麻生磯次<あそう・いそじ>

富士昭雄<ふじ・あきお>

〔略歴〕 明治29年生。

〔略歴〕 昭和6年生。

大正9年東京大学文学部国文学科卒業。

昭和30年東京大学文学部国文学科卒業。

学習院院長をへて現在日本学士院会員。

駒沢大学文学部教授。

文学博士。

対訳西鶴全集 五

西鶴諸國ばなし・懷硯

二八〇〇円

高陽堂製本

昭和五〇年八月二十日印刷
昭和五〇年八月二十五日発行

著者 麻生磯次
富士昭雄

発行者 明治書院
代表 三樹 彰

印刷所 大文堂
代表 梶原忠幸

発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町一の十六
電話 二九四一五三三六
振替 東京三十四九九一

©一九七五 麻生磯次

0393-24805-8305

凡 例

- 一 本書は上段に原文を翻刻し、下段にその対訳文を収載した。
- 一 本文の作成にあたっては、最も信頼できる初板本を底本に選び、さらに諸本を参照して、可能な限り原文を忠実に翻刻するように努めた。挿絵はそのすべてを本文該当箇所収めた。ただし、行移り・丁移りは原文によらず、なお適宜段落を設けた。会話に相当する部分に「」印をつけた。
- 一 句読点 原文には句読点がないので、諸注を勘案して新たに句読点をつけた。
- 一 漢字の翻字は、次のような方針によった。
- 1 正字体 原文の正字体はそのまま正字とした。ただし一般に通用されていない正字体はこれを避けた。
(例) 関↓間 疊↓疊
- 2 略字体 原文の略字体の内、現在も行われているものはそのままとした。これらの中には俗字・通用字等があり複雑であるが、しばらく略字として扱う。(例) 塩、积、条、声、体、才、仏、宝、万、礼
- ただし、右と同じ字でも正字を用いてある場合や、正字の行草体とまぎらわしい次のような略字は、正字に翻字することにした。(例) 栄、覚、勅、観、帰、国、齒、断、変、来、恋
- 3 異体字 読みやすさを考慮して、次のように正字体に改めた。これらの中には古字・同字・俗字・国字などがあ

るが、しばらく異体字として扱う。(例) 蟲↓喜、算↓算、敕↓數、取↓最、杓↓杉、邊↓邊、役↓役

ただし、当時慣用のもので正字に直すことの不適当な異体字や、特定の正字に直しにくい同字は、特に残すことにした。(例) 菴、礪、哥、良、躰、相、藺、泪、瘥、桼、嫗、宰

4 当て字 当時慣用のものはなるべく残すことにした。(例) 社、迎も、風與

5 誤字・誤刻 明らかな誤字・誤刻や、固有名詞の誤字と思われるものは改めた。(例) 右↓古、境町↓堺町
なお次のように、誤字であっても当時広く慣用されたものは、残すべきではあるが、読みやすさを考慮して、ここでは正字に改めた。(例) 勒↓勤、劬↓州

6 漢字につけられた濁点は、訓みを示すものとして妥当な振り仮名に改めた。(例) 共↓共、嬉↓嬉、悲↓悲

7 反覆記号は原則として原文のままとした。なお、漢字一字の反覆記号「々」は通行の「々」とした。

一 仮名づかい 原則として原文どおりとした。ただし、衍字や明らかな誤りはこれを正した。

一 振り仮名 原則として原文どおりとした。ただし、衍字や明らかに誤りと思われるものは改めた。また、本来は本文中にあるべき活用語尾や助詞が、振り仮名中に含まれている場合は、原文のままとした。(例) 取、神田橋たてる

一 清濁 本文および振り仮名の清濁表記には誤りや脱落があるので、新たに削補をおこなった。(例) いへとゞ↓いへども、書へし↓書べし、只↓只

一 半濁点 本文および振り仮名の半濁点の表記を欠くものにはこれを施し、半濁音表記をすべき箇所に濁点のつけられているのはこれを改めた。(例) さつはり↓さつぱり、ぼんと町↓ぼんと町、干瓢↓干瓢

一 特殊な略体および合字、連体字は現行の字体に改めた。(例) け↓候、が↓より、り↓参らせ候

一 語注 本文読解の便宜をはかって、各章の終わりに語釈を注記した。

一 付録 西鶴の読解鑑賞の一助として、巻末に本巻所収作品の「解説」ならびに「付図」を収めた。

「付図」は、「西鶴諸國ばなし」「懷硯」に関係の深いものを選んだ。なお、本全集の他の巻々の「付図」もあわせて参照してほしい。

一 索引 「西鶴諸國ばなし」「懷硯」を理解する上で、重要と思われる語句を選び、巻末にその語句索引を掲げた。

本巻の本文挿絵および「付図」の作品資料には、東京大学付属図書館所蔵の「西鶴諸國ばなし」、早稲田大学付属図書館所蔵の「懷硯」をさせていただいた。

本文の注釈では、先学の研究成果をできるだけ参照したが、特に宗政五十緒氏校注「西鶴諸國ばなし」（日本古典文学全集・井原西鶴集（二））に教示を受けた。また「懷硯」の語釈のうち、巻一の一より巻二の三までは、堤精二・檜谷昭彦両氏との輪読会での成果による。

巻末の語句索引の作成には、長谷川八重子氏の御助力を得た。

以上の方々に、ここに記して深謝の意を表します。

目次

凡例

西鶴諸國ばなし

序 三

卷一

目録 四

一 公事は破らずに勝 六

二 見せぬ所は女大工 九

三 大晦日はあはぬ算用 三

四 傘の御託宣 八

五 不思議のあし音 二

六	雲中の腕押	三
七	狐四天王	二〇

卷二

	目録	三
一	姿の飛のり物	三六
二	十二人の俄坊主	四二
三	水筋のぬけ道	四七
四	残る物とて金の鍋	五三
五	夢路の風車	五八
六	男地藏	六三
七	神鳴の病中	六九

卷三

	目録	四
一	蚤の籠ぬけ	六六
二	面影の焼残り	七〇
三	お霜月の作り髭	七四
四	紫女	七七

五	行末の寶舟	八二
六	八疊敷の蓮の葉	八五
七	因果のぬけ穴	八八

卷 四

目 録	四四
一 形は晝のまね	九六
二 忍び扇の長哥	九八
三 命に替る鼻の先	一〇三
四 驚は三十七度	一〇六
五 夢に京より戻る	一〇八
六 力なしの大佛	一一二
七 鯉のちらし紋	一二四

卷 五

目 録	二八
一 灯挑に朝貞	三〇
二 戀の出見世	三三
三 樂の鯨鮎の手	三六

懷硯

四	闇の手がた	二六
五	執心の息筋	二三
六	身を捨て油壺	三五
七	銀が落てある	二六

序	一四
---	----

惣目録	一五
-----	----

卷一	一六
----	----

一	二王門の綱	一六
---	-------	----

二	照を取晝舟の中	一七
---	---------	----

三	長持には時ならぬ太鞍	一八
---	------------	----

四	案内しつてむかしの寢所	一九
---	-------------	----

五	人の花散疱瘡の山	一七
---	----------	----

卷二	二八
----	----

一	後家に成ぞこなひ	二八
---	----------	----

二	付たき物は命に浮桶	一〇
三	比丘尼に無用の長刀	一四
四	鞍の色にまよふ人	一〇
五	椿は生木の手足	一六

卷三

一	水浴は涙川	三三
二	龍灯は夢のひかり	三〇
三	氣色の森の倒石塔	三四
四	枕は残るあけぼのゝ縁	三三
五	誰かは住し荒屋敷	三七

卷四

一	大盗人入相の鐘	三六
二	憂目を見る竹の世の中	三四
三	文字すわる松江の鱸	三七
四	人眞似は猿の行水	三三
五	見て歸る地獄極樂	三九

卷五

一 佛の似せ男……………三六

二 明て悔しき養子が銀宮……………二八

三 居合もだますに手なし……………二九

四 織物屋の今中將姫……………二五

五 御代のさかりは江戸櫻……………二六

西鶴諸國ばなし・懷硯解説……………三〇

付圖……………三七

索引

入 繪

西 鶴 諸 國 ば な し

一

世間の廣き事、國／＼を見めぐりて、はなしの種をもとめぬ。熊野の奥には、湯の中にひれふる魚有。筑前の國には、ひとつをさし荷ひの大蕪有。豊後の大竹は手桶となり、わかさの國に貳百余歳のしろぶくにのすめり。近江の國堅田に、七尺五寸の大女房も有。丹波に一丈貳尺のから鯉の宮あり。松前に百間つゞきの荒和布有。阿波の鳴戸に、竜女のかげ硯あり。加賀のしら山に、あんまわうの巾着もあり。信濃の寢覺の床に、浦嶋が火うち筥あり。かまくらに頼朝のこづかひ帳有。都の嵯峨に、四十一迄大振袖の女あり。是をおもふに、人はばけもの、世にない物はなし。

世の中は広いもので、さまざまの珍しいことがあるのだが、自分はその広い国々を見物して歩いて、話の種を探ってみた。熊野の山奥には湯の中をおよぐ魚が住んでいる。筑前の國には、一つの蕪を二人で荷うほどの大きなものがある。豊後に産する大竹は、そのまま輪切りにして手桶になるほどであり、若狭の國には二百歳あまりになる白比丘尼が住んでいる。近江の國堅田には七尺五寸もある大女がいる。丹波には一丈二尺の干鯉を祭った宮がある。松前には長さ百間もある荒和布がある。阿波の鳴戸には、竜女の掛け硯というものがあり、加賀の白山には閻魔大王の巾着がある。信濃の寢覺の床には、浦島太郎の用いた火打ち箱があり、鎌倉には、頼朝公の小遣帳というものが残っている。都の嵯峨には、四十一にもなつて大振袖姿をしている女がいる。これを思うと、人間は化物である。世の中にはどんなものでもないものはないということになる。

- 一 和歌山県東牟婁（むろ）郡本宮町の川湯温泉は、川底から湯がわき、湯玉を繰って鮎・鮓（はえ）などが泳ぐという（紀伊続風土記、牟婁郡一七など）。二 筑前の怡土（いと）、志摩郡（福岡県糸島郡辺）から大蕪を産出した（筑前国続風土記、三〇〇）。
- 三 「……漢竹可引爲桶（おけ）斛（ます）者（す）は豊後より」（和訓栞、たけ）。『諸国里人談』四に、元禄年中府中の寺に怪八、九寸の竹が生え、丸盆や樽に用いたという。
- 四 若狭（福井県）の白比丘尼は、四百余歳の寿命を保ったという（本朝列仙伝、三）。
- 五 滋賀県大津市堅田。六 『用捨箱』下に、天和三年刊『年代記』を引き、延宝二年十一月、近江國より名をおよめと言う背たけ七尺三寸の大女が、江戸の見世物に出たという。また延宝末年には大坂道頓堀の見世物に出た（続無名抄、上）。七 幸鯉の宮は石川県珠州（すず）市飯田町（能登名跡志、下）など、日本各地に伝承があり、ここは現在京都府綾部市の九鬼神社に合祀されている井宮（もと綾部の本宮山にあった）であろうか。
- 八 北海道産の昆布のことか。
- 九 阿波（徳島県）の鳴門は竜宮城の東門にあたるという（太平記、一八）。
- 一〇 掛け子のある硯箱。掛け子に筆・硯を入れた、掛け子の下に紙や金銭を入れたりする。一一 石川県の白山（はくさん）には地獄谷があるといわれた。
- 一二 長野県木曾郡上松（あけまつ）町内。寢覺の床で浦島太郎が釣をしたという俗伝があった（和漢三才圖會、六八）。また当地の臨川寺には浦島太郎の遺品という硯箱と釣竿が伝わっている。
- 一三 鎌倉の鶴岡八幡宮別当家に頼朝の日記があるといわれた（二話一言、三）。
- 一四 嵯峨には愛宕山參詣の宿屋があり、その客引き女の若作りなのをいう。「豊土産」二の一にも年配の留女のことを描く。
- 一五 「世に人型化物はなし」（好色盛衰記、一〇三）。

近年諸國咄

大下馬

卷 一

目 録

○ 公事は破すに勝

知恵

奈良の寺中にありし事

○ 見せぬ所は女大工

不思議

京の一条にありし事

○ 大晦日はあはぬ算用

義理

江戸の品川にありし事

一 訴訟。
二 太鼓を破るの意と、訴訟で相手を破るの意をかける。

三 大寺院山内の小院。禪寺では塔頭（たっちゅう）ともいう。興福寺では当時九十六あった（奈良曝、三）。寺中のふりがな、原政には「じちう」とある。

四 男を近づけない、屋敷の奥局（つばね）をいう。

五 一年中の収支の総決算日。

六 東海道五十三次の第一番目の宿駅。江戸の市中には入らない。

④ 傘の御託宣からかさご七

慈悲じひ

紀州の掛作きしう かけづくりにありし事

七 神のお告げ。神が人や物にのりうつたり、夢にあらわれたりして、教え示される言葉。「託」は「託」の当時の慣用字。
八 和歌山県和歌山市嘉家作丁（かけづくりちょう）。
九 原由は「慈悲」とする。

⑤ 不思議のあし音ふしぎ

音曲おんぎよく

伏見の問屋町ふしみ といまにありし事

一〇 京都市伏見区村上町辺。伏見は桃山時代には伏見城の城下町として繁栄したが、元和九年の廃城以後は町も衰微した。しかし、近世を通じて京と大坂、京と奈良を結ぶ交通の要衝であった。特に伏見の京橋は、淀川を上する船の発着所で、この付近には旅館や問屋が多かった。

⑥ 雲中の腕をしうんちゆう

長生ちやうせい

箱根山熊谷はこね くまだににありし事

一一 伊豆と相模にまたがり、今の神奈川県足柄下郡にある。相模の歌枕（類字名所）。「熊谷」は「隈谷」（曲りくねった谷の意）か。あるいは熊笹の生い茂る谷の意で用いたものか。

⑦ 狐の四天王きつね 三

恨うらみ

播州姫路ばんしゅうひめじにありし事

一二 四人の武勇のすぐれた家来。